

## 大串明弘作「愛の燃える時」

<前編>

(効果音) (遊園地のガヤ)

竹田ミキ ねえ正君、次はあれ乗ろうよお。

内島正 えー、スプラッシュ・マウンテン？ あれって3時間待ちだよ。

ミキ いいじゃない、3時間くらい。この間だって、電話で3時間くらい話したことあったじゃない。ね？ いいでしょう？ 乗ろうよ。

正 もう、しょうがないなあ。じゃ並ぶか！

正(ナレーション) 僕の名前は内島正。青春大学1年生。彼女は短大生の竹田ミキ。高校の3年間、同じクラスで、同じ教会に通うクリスチャン同士だ。今日は2人でディズニーランドに来ている。そう、2人で！ 何を隠そう、僕は、念願かなって3日前から彼女と1対1で付き合い始めたのだ。彼女と一緒にディズニーランドに行くってことは、“彼女いない歴”18年の僕のひそかな夢だったから、もううれしくてうれしくて、昨夜は一睡もできなかった！ 3時間も並ぶのはイヤだと言ったけど、本当は全然イヤじゃない。3年間思い続けてきたミキちゃんとゆっくり話せるなんて、それだけで僕は幸せだ。

ミキ …でね、どうも久美子ったら岩崎君と付き合ってるみたいなのよね。

正 えー！ 組子が岩崎君と？ ほんとかよ、それ？

ミキ うん、ほんとみたい。本人に聞いたわけじゃないけど。

正 何だかあいつら、最近仲いいなあとは思ってたけど、まさか付き合ってるとはなあ。

(ナレーション) 久美子っていうのは僕の幼なじみの山下久美子で、彼女も同じ教会に行っているクリスチャン。昔から男みたいなかっこして、男なんかまるで興味ないってタイプなんだ。だから僕も彼女を、異性として意識したことはあまりなく、まるで親友のように、いろいろと相談に乗ってあげていた。その久美子が付き合っているらしい岩崎というのは、高3の時同じクラスだった岩崎慎也。久美子が去年のクリスマスに誘ってから、時々教会には来るんだけど、あまり信仰の世界には興味ないらしい。ひょっとして久美子が目当てだったのかもしれない。

ミキ そういえば、正君って岩崎君とはあまり仲良くなかったわよね？

正 うん、別に仲が悪いわけじゃないんだけど、何となくウマが合わないっていうのかな。あいつ、考え方が何か浮ついてるっていうか…。でも、ボーイフレンドなんて永久にできないと思っていた久美子が好きになったんなら、ま、いっか。岩崎も教会には顔出してるしな。

(ナレーション) それから、僕たちはいろんなアトラクションに乗ったり、ショッピングをしたりして

楽しい時を過ごした。ディズニーランドには前に男友達と来たことはあったが、こんなに楽しくはなかった。好きな人と一緒にいることが、こんなに楽しいなんて! 僕はミキちゃんという彼女が与えられたことを神様に感謝した。

正 うわ! もうこんな時間だ! もう帰らなきゃね。

ミキ えー、もう帰る時間? やだなあ、まだ帰りたくない。

(ナレーション) 子供のように駄々をこねるミキちゃんが、なぜかとてもかわいらしく思えた。

正 さあ、帰ろ。

(ナレーション) 僕はミキちゃんの手を取った。

ミキ え?

正 こうすれば、帰るのだって楽しいだろ?

(ナレーション) 我ながら、すごい大胆。女の子と手をつなぐのは初めてだった。ミキちゃんの手はとても柔らかくて、なぜか僕の心臓の鼓動が高鳴った。

ミキ ねえ、そう言えば来月誕生日だったよね?

正 うん。

ミキ で、何か欲しい物ある?

正 うーん。そんなこと急に言われても困っちゃうよ。

ミキ それもそうね。まだ時間あるから考えといてね。

正 うん。分かった。

(効果音) (電車の音)

(ナレーション) 帰りの電車の中で、だれかが僕の肩をたたいた。

山下久美子 ヤッホー!

ミキ あ、久美子!

正 (同時に) おー、久美子じゃん。どこ行ってたの?

久美子 それはこっちのセリフよ。デートなの? 何か肩の辺りが熱いなあって思って振り返ったら、2人がいるんだもん。

正 あれ? そこにいるの、岩崎じゃん。

久美子 え? う、うん。

正 なんだ、お前が岩崎と付き合ってるっていうのは、やっぱり本当だったか。

久美子 えへへ、まあね。

正 よう、岩崎!

岩崎慎也 おう。デートだって? どこ行ってきたんだ?

正 ちょっと、ディズニーランドまで。

岩崎 ディズニーランドか。うちらはもう2回行ったぜ。

正 なんだ、お前らもうそんなに長く付き合ってるのか?

岩崎 まあ、バレちゃったから言うけど、もう3か月くらいかな。

正 ふーん。でもどうして付き合ってるの隠してたんだ?

岩崎 いやあ、別に隠してたっていうんじゃないけど、何となくね。あんまり人に知られたくないから、こういうこと。

正 ふーん、そうか。

(ナレーション) 何だか、岩崎の考えてることはよく分からない。別に付き合ってること隠さなかったっていいと思うんだけど。

(効果音) (駅前雑踏)

岩崎 じゃあ、おれたちこっちだから。またな。

正 ああ、じゃ。

ミキ ええ。またね、久美子。

久美子 うん、また電話するね～。

(ナレーション) そう言って彼らは反対方向へ歩いていった。歩き出すなり岩崎が、手を久美子の肩に回している。

ミキ ねえ見た？ 岩崎君。肩に手回してたわよ。何か、かなり親しそうね。

正 ん？ ああ。全くわけ分かんないよ、岩崎ってやつは。付き合っているのを知られたくないって言うって、これ見よがしに肩に手を回して歩くんだから。

ミキ そうね。あ、うちここ曲がってすぐだから、ここでいいよ。こっち行っちゃうと正君、遠回しになっちゃうから。

正 そんなこといいって。家の前まで送るよ。

ミキ ありがとう。…正君って優しいのね。

正 何言ってんだよ。照れるな。そんなの男だったら当たり前だって。それに、ミキちゃんみたいなかわいい子が夜道を独り歩きしてたら危ないからね。

ミキ またお世辞言っちゃって。ほら、ここがうち。今日は本当にありがとう。とっても楽しかった。

正 こちらこそ。ほんと言うとね、今日が今までで一番楽しい日だった。僕と一緒に来てくれてありがとう。神様に感謝してる。

ミキ そうね。神様に感謝しなくちゃね。じゃあまたね。明日、電話するね。

正 うん、待ってる。じゃ、お休み。

(ナレーション) そう言って僕は駆け出した。夜空の星がいつにもましてきらきらと輝いているように感じられた。

(効果音) (ドアの音)

(ナレーション) うちに着き、自分の部屋に入ると、僕は神様にお祈りした。

正 神様、今日はすばらしい一日を与えてくださり、本当にありがとうございました。また、ミキちゃんを感謝します。今日一日、一緒にいてますますミキちゃんのことを好きになりました。もしみ心でしたら、将来ミキちゃんと結婚できますように。イエス様のみ名によってお祈りします。アーメン。

正(モノローグ) 結婚かあ。…できたらいいなあ。ミキちゃんとならずつと一緒にいたって思うし。

ミキちゃんの手、柔らかかった…。

(音楽)

(BGM)

(ナレーション)

それから僕たちは、毎週のようにデートをするようになり、手をつなぐのもごく普通になった。映画を見に行くこともあれば、どちらかの家に行くこともあった。電車に乗るとミキちゃんが僕の肩をまくらにうとうととするようになり、そんな彼女を僕はますます好きになった。

正(モノローグ)

彼女の心も体も、すべてが欲しい!

(ナレーション)

ふとそういう思いが脳裏を横切る。ノンクリスチャンの友達では、女の子と同棲しているやつがいるし、付き合っているということは肉体関係があると考えているやつも少なくない。でも聖書は、「不品行をしてはいけない。姦淫<sup>どうせい</sup>をしてはいけない」と言ってる。女の子の中には、しばらく付き合っているにもかかわらず、相手が何もしてこない、そのほうが変だと思う人も多いと聞いた。一体ミキちゃんはどう考えているんだろう。姦淫<sup>かんいん</sup>をしてはいけないのなら、どこまでならいいのだろう。不品行とはなんだろう。そしてなぜ神様は、そんなことを命令したのだろうか。僕の頭は、そんな悩みでいっぱいになった。

ある晩、珍しく母が外出して、父と僕の2人で夕食を取るようになった。

正

ねえ父さん。1つ聞いていい?

父

何だ?

正

結婚する前って、どういう付き合い方をしたらいいのかな。聖書はね、肉体関係は持ちやいけないって言うんだけど、父さんはどう思う?

父

ははあ、さてはミキちゃんのことだな? そうだな、わたしは信仰はないから、もし彼女のとの結婚を真剣に考えているなら、子供さえつくらなければいいんじゃないかと思うな。不倫は騒がれても、婚前交渉ではそれほど騒がれない時代になったからね。実を言えば父さんも昔、母さんとは婚前旅行に行ったんだよ。

正

え? あの母さんと? 信じらんないなあ。

父

どうしてだ?

正

だって、前に母さんに同じような質問をしたら、「そんなのダメに決まってるでしょ!」って顔真っ赤にして怒ってたから。だけど、自分は婚前旅行行っというて、息子にはダメってのも親の身勝手だと思うけどなあ。でも本当に結婚する気で愛したら、やっぱ、いいのかなあ。聖書の方が古いってことか…。

(ナレーション)

その時だった。

(効果音)

(電話音)

正

はい、内島です。あ、ミキちゃん。どうしたの? え、何だって? 久美子が妊娠?

(ナレーション)

耳を疑った。クリスチャンの久美子が、結婚前に身ごもった。相手は、未信者とはいえ、教会にも来ているあの岩崎だろうか? 何となく大事なものを奪われ

たようで、久美子を裁く気持ちと、岩崎への敵意にも似たような気持ちで、心をかすめた。でもそんな自分だって、“ミキちゃんのすべてが欲しい。そうしてもいいんじゃないか”なんて思ってる。

正(モノローグ) (効果音)(多重エコー) どうすればいいんだ? 一体どうすれば?  
(ナレーション) 僕の頭の中は、グルグルと堂々巡りをしていた。

<後編>

(ナレーション) 久美子が妊娠した…。ショックだった。幼なじみでしかもクリスチャンの久美子が、何でも相談し合った久美子が、いきなり妊娠だなんて…。僕はすぐさま公園へと走った。もう薄暗くなり、だれもいなくなった公園で、ブランコにぼつんと座っている人影があった。

正 久美子?

久美子 正? 正なの? やっぱり来てくれたのね。

正 久美子、一体どうしたんだ? 妊娠したっていうのは本当か?

久美子 (泣き出す)

正 確かなのか?

久美子 分かんない。でも、多分そうだと思う。予定日を3週間過ぎてもないから。昨日妊娠検査薬を買ってきて試したの。そうしたら陽性だって…。

正 でも、よく分からないけど、あれってちゃんとは分からないんだろ? やっぱり医者に行ったほうが…。

久美子 (いらだって) そんなの、わたしだって分かってる。入ろうとして、産婦人科の前を何度も往復した。正には分からないでしょうけど、そんなに口で言うほど簡単じゃないのよ!(泣く)

(ナレーション) 久美子の言うとおりだ。確かに僕には、産婦人科の門をくぐるということが、女の子にとってどれほど勇気の要るものかは、想像もできなかった。

正 …ごめん。でも、どうしてこんなことに?

久美子 …

正 岩崎なのか?

久美子 …うん。

正 どうして? 君はクリスチャンだろ? 神様の命令はどこ行っちゃったんだよ。

久美子 分かってたわよ! 頭の中では…分かってた。いけないって。神様の戒めに背くことだって。でもわたしの部屋で彼と2人きりである時にね、「お前のこと、愛してる。好きで好きでたまらない。お前のすべてが欲しい!」って言われて、いきなり押し倒されてしまって。女の子ってね、好きな人にそう言われると弱いんだよ。もし今拒んだら、彼が離れていっちゃうかもしれないって思うと、もう抵抗する力がなくなってしまって…。

正 でも、信仰はどうしたんだよ。神様はどうしたんだよ。

久美子 (泣く)

(ナレーション) その時だった。向こうから岩崎が近づいてきた。

岩崎 久美子、どうしたんだ、こんな所に呼び出して？

正 岩崎、お前ってやつは!(殴りかかる)

岩崎 な、何すんだよ!

久美子 やめてー! やめてよ! もうこれ以上たくさんよ! もうこれ以上…。

岩崎 「これ以上」って何だよ。

正 お前、知らなかったのか? 久美子が妊娠したかもしれないってこと。

岩崎 え? 妊娠…。

正 おい岩崎、どうしてなんだよ。どうして久美子のことをもっと考えてやらなかったんだ? こうなったらさ、傷つくのは女だろ? 久美子のことを愛してるなら、どうして我慢できなかったんだ? お前だって、聖書が結婚前の男女に清い交際を求めていることぐらい知ってるだろう?

岩崎 …おれだって、最初はそうしようと考えたさ。でも教会では、みんなから何となく監視されてるみたいで、2 人だけになりにくくて。何となくお互いにギクシャクしちゃうんだ。その反作用みたいに、2 人だけになると余計燃え上がっちゃう。最初はキスぐらいはいいかって程度だったけど、とうとうある晩一線を越えちゃって…。もうそれからあとは、「お互い好きなんだから」ってずるずると…。でもな、内島、お前も分かってんだろ。男には生理的にどうにも抑えの利かない性欲ってのがあるんだよ! 目の前にいる好きな女と結ばれたいって思ったら、もう体が言うことを聞かないんだ。クリスチャン面してたって、お前だって同じだろ? おれを責めるなら、その前に、こんなコントロールの利かない「性」をつくった神様を責めろよ! 愛し合っているのに肉体関係はダメだなんて、いまどきそんなことを言うほうが間違ってるぜ! そうじゃないか?

(ナレーション) 岩崎の言葉に僕はハッとした。

正(モノローグ) 自分だって、一歩間違ったら岩崎のようになっていたかもしれない…。

(ナレーション) 僕はそれ以上何も言えなかった。とりあえず岩崎は、久美子の両親に話しに行き、そのあとで今後のことを考えようということになった。僕は2人が久美子の家に入るのを見届けて、家に戻った。頭には、さっきの岩崎の言葉が響いていた。

岩崎 (効果音)(エコー)おれを責めるなら、その前にこんなコントロールの利かない「性」をつくった神様を責めろよ!

正(モノローグ) 本当にそうなんだろうか? 悪いのは神様なんだろうか? いや、そんなはずがない。「神のつくられたものは、すべて良かった」と聖書は言ってる。じゃあ、一体だれが悪いんだ? 何がいけないんだ?

(ナレーション) 僕はその夜、一晩中神様にその答えを祈り求め、聖書を読んだ。しかし、納得のいく答えは与えられなかった。分かったのは、最初の罪を犯したあとの人間の、乱れに乱れた性の歴史だった。レイプ、オナニー、近親相姦、ホモセクシュアル、一夫多妻、略奪婚と、己の欲望を満たすために、人間は性をほしいままにしてきたのだ。本来よきものとしてつくられ、結婚生活にのみ許された「性」が、相手に真の喜びを与えるための「性」が、人間の罪によってこんなにも汚されてしまったのか。僕は次の日、ミキちゃんの家を訪ねた。

(効果音) (ドアベル「ピンポーン」)

ミキの母 は一い、どちら様でしょうか？

正 こんにちは。内島です。

母 あら、正君。いらっしゃい。さ、どうぞ上がって。ミキ、正君がいらしたわよ。

ミキ あ、正君。今電話しようと思ってたところだったの。で、どうだった、昨日？

正 それがさあ。あれから公園で…。

(ナレーション) 僕はミキちゃんに一部始終を話した。

ミキ ふうん。そうだったんだあ。岩崎君、そんなこと言ってたんだあ。

正 確かに、岩崎が言うように、本当に好きなら、まして結婚する気なら、セックスは結婚前か結婚後か、時間の問題だけじゃないのかって考えがちだ。でもさ、結局それって、みんな性の快樂の部分しか見てないように思えるんだよね。性にはもっと重要な意味があるんじゃないかな。

ミキ うん、そうねえ。そもそも神様って、人間が良い家庭をつくり、子孫を残すために性を与えられたと思うのよね。ほら、神様が「産めよ、増えよ、地を従えよ」と言われたってあるでしょ。快樂っていうのは、二次的なものじゃないのかな。

正 そうだよね。だけど、今はセックスだけが一人歩きして、快樂の面しか見ていない人が多いんじゃないかな。

ミキ 実はね、わたしもそのことで悩んでたんだ。

正 え、ミキちゃんも？

ミキ うん。あのね、もうすぐ正君の誕生日でしょう？ でね、こないだ友達に言われたの。相手の男に「何欲しい？」て聞いて、「お前が欲しい」とか言われたらどうすんのって。まさか、正君に限ってそんなことないとは思ってたけど、もし言われたらどうしようって考えてた。でね、こないだ、結婚したばかりのクリスチャンの先輩に電話してみたの。中原さんっていうんだけど。そうしたらね、その先輩がこう言ってた。

(音楽) (ブリッジ)

中原先輩 性は決して汚いとか、悪いものじゃない。むしろ清くて、すばらしいものなんだ。でも、それと戦っては勝ち目はないな。

ミキ 性と、戦う？

先輩 ああ。性の欲望ってね、ガソリンみたいなものだ。ガソリンが爆発したら、もう人間にはどうしようもないだろ？

(音楽) (FO)

正 ふうん。ガソリンかあ。

ミキ うん。つまりね、人間が生まれつき持っている罪や、サタンは、人間の「性欲」ってものに、人一倍付け込んでくるらしいのよ。そうなったら、もう人間の力ではセーブできないんだって。岩崎君の場合もそうだったんじゃないのかな。

正 じゃあ、僕がそうになってしまったら、どうすればいいんだろう。

ミキ そうなのよね。問題はそこなのよ。だってこの性欲は、男の専売特許ってもんじゃなくて、女にも、控えめで受け身だけど、ちゃんとあるんだって。ドキンとしちゃった。だって、正君に「欲しい」って言われたときのこと、いろいろと想像しちやったりするもん。だから先輩は、「戦っちゃいけない」って言ったの。

正 え？

ミキ だから、そういう戦いの場をつくらない。性の誘惑に負けそうになる 2 人だけの密室を徹底してつくらないってこと。それしか、人間に打つ手はないんじゃないかって。

正 そうか…。

(ナレーション) 僕は、ミキちゃんとの交際のこと、将来のこと、すべてイエス様にお任せすることにした。それが、人一倍誘惑に弱い僕には、一番確実に、彼女との清い愛を育てる方法に思えたのだ。時々、彼女を抱き締めて、すべて自分のものにしたくなる誘惑に襲われる。それに勝てる自身は、正直言って今の僕にはない。でも、どんなときにも、ミキちゃんと僕の間、イエス様にいていただく。あ、そうだ、もう 1 つ言っとくことがある。岩崎と久美子のことだ。あれ以来、僕とミキちゃんは、2 人のためにずっと祈っていた。彼女はやはり妊娠していたのだ。ある日のこと、岩崎が僕の家を訪ねてきた。

岩崎 内島。この間はひどいことを言って悪かった。だけK度、虫も殺せないと思っていたお前に、ぶん殴られたあの一撃が効いたよ。あのあと、おれなりに、久美子への気持ちを整理して、やっぱり彼女を愛していると確信できた。教会の牧師さんにも話を聞いて、おれが自分の誘惑に負けて、久美子を深く傷つけてしまったことを、今は本当に後悔してる。教会で「罪」って言葉を聞くのが一番イヤで、“みんな、偽善者ぶりやがって。「罪」なんて知るか”って思ってたけど、おれの、あの自分中心が罪なんだって、分かったような気がするよ。

正 そうか。岩崎、それでお前…。

岩崎 ああ、その責任は、自分なりに取るつもりだ。久美子と話し合って、2 人とも学校やめて、子供が生まれるまで働くことにした。その前に、おれたち、まず結婚するよ。その、“神様の前”でな。祈ってくれよ、おれたちのために。



(ナレーション) それまで、何となく、浮ついて嫌なやつと思っていた岩崎の、それは初めて見る男らしい顔だった。

正(モノローグ) 神様、ありがとう。

(ナレーション) 僕は思わず、そうつぶやいていた。

(完)